



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑報. 地球 1929, 11(6): 468-471

ISSUE DATE:

1929-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183607>

RIGHT:

朝鮮の有煙炭(市村毅)

◎朝鮮鐵區一覽(昭和四年一月一日現在) 朝鮮總督府殖産局

鐵務課編 朝鮮鐵業會發行 三月 定價一圓

○Dry Distillation of some Japanese Coals. (Chōzō Iwasaki and Kunazō Sasaki) *The Technology Reports of the Tohoku Imperial University*. Vol. VIII, No. 2 1929

◎The Geology of Petroleum and Natural Gas. By Ernest Raymond Lilley. D. Van Nostrand Co. New York 1928. 13Yen (丸善)

○科學知識 第九卷第四號 四月

南洋の泰景色(福地信世)

○地理學評論 第五卷第四號 四月

湖水中に於ける酸素含量と水素イオン濃度の水平分布

(上)(吉村信吉)

吾が國に於ける大都市と地方の死亡率について(今井文夫)

蜜柑の生産地帯(上)(川口丈夫)

ゴム生産地とアメリカ合衆國(佐々木彦一郎)

○地理教育 第一〇卷第一號 四月

天文教材の選擇と天體距離測定法の伸展(關口鯉吉)

地學上より見たる甲斐の一史蹟(石原初太郎)

相州江の島の地質(藤本治義)

阿蘇火山最近の火山活動に就いて(上)(津屋弘遠)

シンカボールの重要性(玉城肇)

日本群島の三角洲の研究(二)(東木龍七)

南アメリカ經濟地理(三)(下川禮佐)

東京市の地形と交通線(上)(淺井治平 山口孝義)

○歴史地理 第五三卷第三號 三月

利根運河開鑿の功勞者廣瀬誠一郎(長南倉之助)

江戸時代に於ける農村人口増減の一二例(島羽正雄)

## 雜報

○廬山の遠望(挿繪説明) 廬山は九江から南十五哩、海

拔三千五百呎、冬期と雖も華氏十五度を下らず、七八月の最高七十五度、最低六十六度であるから、漢口及長江一帯の外人の避暑地となつた。そこを特嶺といふ。この圖はその特嶺にゆく田舎道の山麓である。江南一般にかうした掛橋、眼鏡橋が多い。橋と塔とは、その民屋の粗末なのに比べて、驚くばかり立派なものが多い。古い時代の文化を象徵するものである。江南の民屋には窓が少い。切妻瓦葺である場合には、極めて頑丈な防火壁をつけるのであるが、こゝまで山の中に入ると、さうしたものが無くなつて、かやうに「ケラバ」を出した日本の長屋風な土蔵造りになる、この川の水は澄んである。夏は田に灌ぐので、田圃の畦や大きな、餘程我國の田舎に

近い。

我等は昨年十二月九江の大源洋行の店主及下婢に案内され、九江から乗合自動車にのつて、この麓の村に達しこゝで山輪にのつて登つた。不幸にして體重が重いといふ厭で途中で下されかけたが、三牧肩にしてやつと上つた。大源洋行の別館で一泊、雨と露との寒い特敵であつたため、四顧茫々、山に登つて山を見ず、廬山を訪れて廬山を知らず、明くれば細雨猶止まず、草木もすべて氷華につつまれて、時ならぬ花を見た位がせめてもの心やりで、下山したことであつたが、天氣の惡しい時には、登つてはいけないといふことを後の旅行者にしらしておきたい。(F)

### ○福岡縣地理學會の近業

福岡師範の金尾宗平氏を中心としての地理學會は、さきに地理研究第一輯として會員の研究報告を出版した。同市中島町の金文堂書房から賣り出してゐる。今回之を手にしたが定價は不明である。菊版一八二頁で、體裁は地理教材研究そのまゝである。蓋し奈良の西田君が作つてゐる同書と妹分といふ格である、第一輯には金尾宗平君の福岡の研究があり、その第四章に市街の構造と其考察といふ珍らしい見出しがあるので大に期待してみたが、その内容は上水、下水、築港の説明に過ぎない。太宰府の關門、外港として繁榮した古代を回想して、そこに特殊の市街構造があるべき筈だと考へるが、さうした研究には觸れてゐない。「歴史と地理」などに福岡に關した先輩の研究も出たことがあ

る。少しは考古學の方面にも解説が欲しいと思はれる。第二の地理教材方面はフエアグリーヴ氏の第一章の翻譯である。

柳原赴氏の宗像郡。久保田修造氏の筑後川流域の自然と人文（これは旅行日記）。中島幸市氏の久留米市の地理的研究などがあつて秋山新氏の三井郡水路網がある、（これは面白さうな問題であると思つた）。中川知進氏の浮羽郡の人口地理。安藤修藏氏の脊振アロツク。其他二三の小品文や參考書の紹介がある、すべて同人の小學校教育の餘暇の研究であるから、題目の配列はうまいが、内容もしくは記載は簡潔にすぎる恐があるのが残念である。我等はかうした系統的の記載よりも、寧ろ諸君の左右に目撃してゐられる市街や田畑、農業や工業さういったもので客觀的描寫を要求する。論文にならないでもない、事實の報告でありたい。予はかうした福岡縣地理學會の拔群の努力に敬意を表すると同時に、各地方での同様な報告があまりに系統的であり分類的であるのに嫌たらぬ一人である。金尾君の如き熱心にして文才のある先達を持つ福岡縣は幸福であると思ひこの苦言を呈する。(藤 田)

### ○米國製鐵業の發達

鐵といふものが初めて米國に於て產出されたのは一六二〇年の昔シエムス河支流フォリンダ、クリーク地方であつた。十八世紀初迄は製鐵地はマサチューセツト地方にあつた。つぎに米國で鋼がつくられたのは、一七二八年カネチカツト州ハートフォード地方であり、良質の鑄鐵はシンシナチに於て一八三二年に出來た。爾來鐵及鋼の產

出は比較的少量に止り、其產出方法も幼稚で、工賃も高かつた、故に當時は鐵の材料よりも、安價な木材の方が一般向であつた。一八一〇年米國內銑及鋼の產出高は各五三、九〇八噸内外であつた、六十年の後は銑一、六六五、一七九噸、鋼六八、七五〇噸を産し漸く斯業の發展を見た。

一八七〇年にベツセマー製鋼法の發明があり、佛國に於てマルチンが開爐製鋼法を發明したので、大に刺激を與へた。

この新方法で從來鋼は小型のものにしか用ひられなかつたのがこの後大型の用に供せらるゝことになつた。恰もよし、前記製鋼法の發明と時を同じくして、米國は南北戦争終結時代、換言すれば米國の天惠資源の開發初期時代に入つた。そこで製鐵業の如き大規模につくられたのである。

## 銑

## 鋼

一八七〇	一、六六五、一七九	六八、七五〇噸
一八九〇	九、二〇二、七〇三	四、二七七、〇七一
一九一〇	一三、七八九、二四二	一〇、一八八、三二九
一九二〇	三六、九二五、九八七	四二、一三二、九三四
一九二七	三六、五六五、六四五	四四、九三五、一八五

右表の示めす通り、大量生産の過程は年と共に著しく開展し一九二三年には銑四〇、三六一、一四六噸、一九二六年には鋼四八、二九三、七三六噸の最高記録を示した。

米國に於ける斯業は歐洲でも同様に發達したのであるが、一九一三年には米國の產出能力三千五百萬噸は世界製鐵總量

の約四割二分に相當した。同年中歐洲の製鐵能力は四千九百六十萬噸であつて世界產出總量の五割六分、歐米以外の製鐵能力は僅に百八十萬噸、世界總量の二分しか出なかつた。

然るに一九一三年以後其割合は著しく變化し、一九二六年に於ける米國の製鐵能力は六十萬噸の多きに達し、其產出高は世界製鐵高の五割三分を獨占したのに反し歐洲の產は四割四分に減じた。

又一方歐米を除く他の國々の斯業も同時に漸進し其實際生産高も二百八十萬噸を算し世界製鐵の三分をしめるやうになつた。

蓋し世界に於ける製鐵能力は一九一三年に六千六百四十萬噸、一九二六年は一躍一億二千五十萬噸に激増して、實際製鐵高も七千六百六十萬噸から、九千八百八十萬噸に増加した。

米國の製鐵がいかに膨大であるかといふことは、例令は一九二六年の製鐵高四千八百萬噸を得るためには驚くなけれ二億萬噸の原料をこなしたので、十四億弗以上の勞銀を以て百萬人の勞働者を使つた結果である。かくてその製品價格は三十億弗に上つた。尙この鐵を原料として製作された各種製品がいろいろの機關をへて、最後の消費者に至る迄の賣上高を計算すると、實に七十億弗の巨額に達するのである。

米國の製鐵業の現在投資は不明ではあるが、凡六十億弗見當である。

しかしかやうにその產出が増加したので、需要増進に正比

例しない。生産高と需要との關係は六對五の割合である。故に實際ベッセマー開爐の生産能力は六千萬噸なるに對して、一九二八年の實際は五千萬噸を産したるに過ぎない。そこで最近米國製鐵業者は現状改善の必要を考へてきた、即ち工場及諸設備の現代化の計畫と實行である。例令は一九二八年中ミネソタ州の或大鐵山では、六百萬噸の鐵鐵を採掘したが、この鐵鐵全部は現場から、掬場、之を直接發出地迄輸送するのに巨大な電氣及蒸氣シヨベルを使用したから、採掘から輸送迄僅に四百人の勞働者を要したるに過ぎなかつた。その間一つとして人の手に觸れた鐵塊は無かつたのである。蓋しかうした設備によつて勞働者の伎倆及能力は益々進歩し工場設備の改善によつて、更らに勞働者及其家族の保護並慰安を計るやうになつたのである。

かくて一九二八年米國にて産出された鋼鐵地金の生産高は四九、八五三、二五噸、世界産出量の大半を占め、その殆ど全部が、米國內地に於て消費されて居るのであり、其原料たる鐵鐵の大部分は米國內地のものであるが、荷キユバ、チリ、アルセリヤ等の諸國から毎年多少の輸入を仰であるのである。

## 質疑應答

問 ロシアの最近の外國貿易と其事情(熊本I生)

答 一九二七—二八年度のソヴェエツト聯邦の外國貿易は

輸出七億七千三百九十萬留、輸入九億四千四百七十萬留、合計十七億萬留、内對歐國境貿易額十一億五千萬留に上つた。之を前年度の十四億八千三百二十萬留に比較して一割五分九厘の増加であるけれども、其貿易尻は却て一億七千八十八萬留の入超である。

こゝに新しいロシアの缺陷がある、革命後逐年漸減の歩調を辿り來つた穀物の輸出は、前年度迄は辛じてその類勢を維持したけれども、本年は激減して三千八百萬留臺に下つた。歐洲での穀物倉と稱された露國の貿易から、殆ど穀物の姿を沒せんとする有様である。一九二七—二八年度の外國貿易は實にロシア現下の經濟狀態を最善く反映する。

元來穀物輸出はロシア貿易の樞軸を爲し、輸入は唯其輸出に依りてのみ順調な發展を遂げて來たものであるから、穀物輸出の激減が、外國貿易の全般に亘り、重大な變化を齎すに至つたことは當然である。

穀物輸出減少に基因する貿易上のバランス填補について政府當局の取つた苦心の跡は統計にも現はれて、工業的農作物、畜產品、動物性産物の輸出は何れも前年度に比して顯著なる増加を示めてゐる、即ち穀物以外の農産物は前年よりも七千九百萬留、工業品は前年よりも九千二百五十萬留を増加した、しかし結局輸入超過に終つたことは、何といつても勞農政府の痛手である。従つてこの輸入超過に對し、政府當局者はこの超過は、クレサツトにて輸入したもののなるが故に、直ちに決済を爲すことを要せざるものであると説明をしてゐる